【別紙様式Ⅰ】 令和7年度　学校評価報告書

学校名　厚木市立小鮎小　学校

校長名　江上　純子

厚木市教育委員会の基本目標	1　自ら学び、鍛え、未来を拓き、夢や可能性に挑み続ける力の育成 【挑戦】 2　自他の命や豊かな感性を大切にし、多様性を認めながら共に生きていく力の育成 【共生】 3　変化する社会に自ら進んで関わり、人々と協働してより良い社会を創る力の育成 【創造】

学校教育目標	学校経営の方針
豊かな心と、たくましく生きる力をもった児童が育つ学校	こ：根気強く自分で考える子　あ：明るく元気な子　ゆ：豊かな心で思いやりのある子 「自分で考え　共に学び　みんなが楽しい」

今年度の重点目標

【A：まなび】学び合う力の育成　・・・　課題解決能力の育成　他者理解・自己表現力の向上　自己選択・自己決定の実現
【B：こころ】互いに認め合う心　思いやりの心を育む　・・・　自分も相手も大切にする心の育成　きまりを守る心の育成　SOSを出す力の育成
【C：からだ】健やかな体と環境をめざす　・・・　健康な生活を送る　たくましい体づくり　きれいな環境づくり
【D：チーム小鮎】児童主体の特別活動　・・・　安全意識と判断力の育成　児童主体の学級活動　児童主体の特別活動

評価項目・指標等	基本目標との関連	具体的な取組	成果と課題	次年度への具体的な改善策
【A：まなび】 学び合う力の育成	1・2・3	課題解決能力の育成	◇グループ活動などにおいて、他者とのやり取りの中で、自分の考えや思いを表現する機会が増え、話す力が身に付いてきた。 ◆各学年の学習に合わせた作文活動等を行い、語彙力の向上を目指したが、書く能力についてはあまり力が身に付いていない。 ◇校内研での取組を基盤として、地域に根ざした人材を見つけ、地域と共に活動するような取組をすることができた。 ◆学年の系統性や思考ツールの一貫性を推進することには課題が残った。	・日記等の課題を統一して出すなどして、簡単な文章の作り方や自分の思いを文章に結びつけるという経験をさらに積ませていく。また、ワークシートなどを用いながら、作文の型を定着させたい。 ・生活科・総合的な学習の時間において、自分の足跡がわかるように、成果物をファイリングするなどして積み重ねた学びを基に、自分の考えを書くことができるようにする。 ・思考ツールなどのデータの保存場所を決め、学年に応じて使用できるように整理する。
	1・2・3	他者理解・自己表現力の向上	◇スタンダードを意識し、UD化とも関連付けて授業の流れや環境づくりを考えることができた。 ◇各教科において、学年の実態に合わせてペア学習やグループ学習を行い、協働的に学べる場を設定できた。	・「あゆっこのあたりまえ」「小鮎小スタンダード」を前提とした指導をしていくことで、どの教員どの教室でも同じ指導や環境づくりを目指していく。
	1・2・3	自己選択・自己決定の実現	◇学年の実態や教科・単元に合わせて、個別最適な場や自由進度学習をすすめることができた。 ◆個々の取組はあるが、全体への周知や学年の統一性・系統性が薄く、学校全体でやっていこうという意識付けや学校全体での取組をするまでには至らなかった。 ◇GIGAスクール端末の活用とタイピングタイムの設定により、ICT活用を推進できた。 ◇中学年以上は自主学習ノートの実施、低学年はあゆっこチャレンジを通して自主学習への意欲付けを行うことができた。	・低学年はあゆっこチャレンジで、個別最適な学びの場の設定や自主学習の基礎をつくる。高学年は教科や単元に応じて自由進度学習を進めていく。 ・朝のクロームタイムを利用して、タイピング能力の向上やドリルパークを活用した基礎学力の向上、ICT活用スキルの向上を目指す。 ・得た情報を取捨選択し、根拠として表現するために、情報を選ぶ時の基準を設定し、選び取った情報をまとめ、文章に表す活動を増やしていく。 ・3年生以上の自主学習ノートの週1回の取組を継続していきたい。
	1・2・3	自分も相手も大切にする心の育成	◇学年で週1回同じ時間に道徳授業を担任がローテーションで行った。同じ授業が複数回できることによって教材研究が深まり、授業力向上につながった。 ◇人権週間を5月にも設定し、早い段階で、朝会で人権について、あゆっこ・やまびこルームの説明を含めた話をすることができた。 ◆毎日の学校生活の中で、人権意識を育む指導が必要である。子どもたちがピンクシャツデーの意識を高め、活動につなげることが十分にできなかった。	・ローテーションを学年を超えて行うことにより、多くの教員の目で児童の実態把握ができることから、さらなる推進をしていく。 ・委員会主体でピンクシャツデーの活動をすることで、より充実した活動につなげていく。

【B：こころ】 互いに認め合う心 思いやりの心を育む	1・2・3	きまりを守る心の育成	◆職員間では、いじめの定義を理解し、アンテナ高く指導に当たることができたが、児童の中にはいじめの定義があいまいなところも見られた。 ◇「あゆっこのあたりまえ」のめあてを学期ごとに更新して徹底を図った。振り返りについては、1か月ごとに行い、反省を次の月に活かすことができた。 ◇毎週の情報交換で、児童の様子やその他気になることを検討することができたり、職員に周知したりすることができた。 ◆記録の作成方法と共有が十分ではない。	・5月の人権週間で、いじめの定義を全校児童に指導するなど、年度当初に定義を確認する機会をつくる。 ・「あゆっこのあたりまえ」をもっと意識して過ごせるように、児童主体で生活安全委員会の常時活動として放送するなど、呼びかけをしていく。また、実施方法や取組など教員間で共通理解を図る。 ・情報共有において校務支援システムの機能を使うことができればよりシンプルに記録・共有することができるため、活用していく。
	1・2・3	SOSを出す力の育成	◇年間5回の生活アンケート実施のうち、5月と9月に実施後児童との教育相談を行い、いじめを含めた児童の状況を定期的に把握すると共に、教育相談の時間を設定することによって以前より相談しやすい環境づくりが進んだ。 ◆「こころの健康観察」の継続実施が難しく、徹底できていない。 ◇サポートタイムを全時間割り振り、対応する児童がいる場合には、相談室を基本とし、いない場合は校内を回って支援できるようにした。また、やまびこルーム担当とも連携を取りながら児童の支援を行うことができた。 ◆全時間サポートタイムの対応ができるように組んだが、年度途中に人員配置が変更となり、一部の教員に負担が偏ってしまった。 ◇必要な関係機関と連絡を取り、問題の解決に向けて連携することができた。	・「こころの健康観察」を何のために行っているのか児童とも再確認し、教員の児童理解のためでもあるが、児童自身が自身の心の状態を感じ、それを発信する場の一つだということを押さえた上で実施していく。
【C：からだ】 健やかな体と環境をめざす	1・2・3	健康な生活を送る	◆早寝、早起き、朝ごはんの規則正しい生活リズムの大切さを継続的に呼びかけたが、定着に結びつけるところまでいかなかった。 ◆歯と口の健康週間期間に各学級で保健指導を行い、児童の口腔内に対する意識を高めたが、う歯発生率の低下等には繋がらなかった。 ◇各学期ごとに食育の場を設定し、定期的な指導で食に対して関心を持たせ、食事の重要性を伝えることができた。 ◇給食週間で栄養士が各学級で直接指導を行い、食育の周知、充実を図った。 ◇歯みがきカードや健康手帳などを通して、生活習慣に対する協力を呼びかけた。	・規則正しい生活リズムの「定着」が厳しい現状があるため、次年度は定着につながるような「支援」を中心にして呼びかけを継続していく。特に、睡眠についての働きかけに重点をおく指導の場を設定する。 ・課題である歯科については、次年度も全クラスで歯科指導を実施できる時間を確保していく。また、歯みがきカードについても、一人一人自分の生活習慣について、振り返る機会として継続していきたい。 ・給食については、食育指導と結びつき、残量が少なくなる日も見られた。また、子どもたちの食に対する興味関心が少しずつ高まってきている。その反面、食事のマナー面や給食の準備や片付けの面ではまだ課題がみられる。次年度は給食時間を5分延長して設定し、それらの指導を徹底していきたい。
	1・2・3	たくましい体つくり	◇体育授業の充実を行うため、神奈川県教育委員会に体力づくりキャラバン隊の派遣を依頼し、休み時間の外遊びの機会を設定し、実行できた。 ◇本校児童の体力面の課題について、現状を把握し、今後の活動について学んだ。	・新体力テストを実施し、児童の測定値の結果やアンケート結果から運動に対する意識に課題が見られた。共有した児童の課題を元に、次年度は体育授業の充実と、運動に親しめる活動をさらに推進していく。
	1・2・3	きれいな環境づくり	◇清掃活動やプール清掃、環境整備活動への協力を依頼し、連携を図った。 ◇きれいな学校、きれいな環境づくりを目標に、清掃のやり方を縦割りから学年清掃に変更し、指導の仕方を共有した。 ◇畑・花壇計画作成に沿って、畑の活用ができた。	・清掃については、学校運営協議会で提案があり、変更した学年清掃のスタイルを次年度も継続していく。それに合わせ、年度当初から清掃の仕方を職員間で再確認し子どもたちに伝えていくやり方を徹底する。 ・PTAや地域の方々の協力を得ながら環境を整えていきたい。 ・畑の活用は定着してきているので、引き続き継続していく。また、花壇についても協力者を募って活用を図る。

【D:チーム小鮎】 児童主体の特別活動	1・2・3	安全意識と判断力の育成	◇日常の指導や避難訓練に加え、あゆっこ安全タイムを新設し、各学級で安全に対する意識を高める指導を定期的・継続的に行うことができた。 ◆安全に関わる声かけや動画視聴など、児童に伝わりやすいように工夫して指導を続けたが、学校内での過ごし方や放課後の自転車の乗り方等において、児童が安全を意識できているとは言えない現状がある。	・あゆっこ安全タイムを年間を通して行う。また、児童の過ごし方や課題を見つめ、その時の児童に必要な指導内容を考え、計画・実施していくようにする。 ・動画視聴などでわかりやすく伝えるとともに、児童が学んだことを、自分事として自分の生活に生かせるような声かけを続ける。
	1・2・3	児童主体の学級活動	◇学校目標をふまえ、児童の思いが込められた学年目標を立てることができた。また、定期的に学年目標の振り返りを行うなどして、意識して過ごせるようにした。 ◆学級会の進め方ファイルを各学級に配付し、話合い活動が進められるようにはなってきているが、自分の意見を伝えること、他の意見を受け入れること、折り合いをつけることにおいては、まだ課題が残る。	・次年度も、児童の思いが込められた学年目標を立てる。また、定期的に振り返りを行い、児童が目標を意識したり自分自身を振り返ったりできるようにするとともに、達成度などが目に見えてわかるような工夫をする。 ・学級会や朝活動「あゆっこタイム」などでの話合い活動を充実させる。自分の意見を伝えたり、自分とは異なる意見を受け入れたり折り合いをつけたりし、様々な意見にふれながら共に考えて良い方法を見つけられるような経験を多くしていく。
	1・2・3	児童主体の特別活動	◇学級・学年を軸にしながら、様々な特別活動を通して、多くの人とかかわる機会をもつことができた。 ◆行事等を通して、仲間と協力して活動することはできていたが、互いの良さや違いを認め合い、より良い人間関係をつくるという点では、まだ難しさを感じることが多かった。 ◇フレンド集会やあいさつ運動等異年齢での活動を継続的に取り入れ、責任感や協力することの大切さを学ばせることができた。 ◆どの活動においても、まだ教師のかかわりが大きく、児童が自分から主体的に考え行動するまでには至っていない。	・新体力テストやスマイルウィーク(あいさつ運動)など、これまで取り組んできたものはもちろん、その他の学習や活動においても異学年での活動を意図的・継続的に取り入れていく。 ・教師のはたらきかけ方を工夫したり、活躍の機会を増やしたりして、児童が自己肯定感を高め、より主体的に考え行動できるようにしていく。

今年度の学校関係者評価委員会からの意見

学校と地域が共に創り上げる学習活動や取組において、生活科や総合的な学習の時間を中心に、地域の人たちや地域にある施設やお店とのかかわりが推進され、より学習の幅が広がってきた。これらの協働活動をさらに進めていくことができたら、子どもたちの学びもより深いものにつながっていくと思われる。今後も、地域の人たちとふれあう機会を増やし、本物の学びを通じて、子どもたちの自己肯定感を高めるとともに、成長を促していきたい。

昨年度の課題であった児童の清掃活動については、学校運営協議会の協議の中でも話題に挙がり、その中で掃除道具の使い方や整理整頓などポイントを示したポスターづくりの案が出されたことから、実際に委員が作成して掲示し、児童にも呼びかけを行った。また、年3回、一緒に掃除を行うピカピカ清掃週間での具体的な取組や支援が行われ、一定の成果が得られた。

児童の学力向上に関する課題として、保護者が目一杯に働き、家庭に余裕がないことや、児童の学力の二極化、持ち物忘れの問題などが挙げられ、家庭の教育力の基盤や保護者からの働きかけの有無が大きいという意見をいただいた。このような状況下で、地域学校協働活動を推進することは、子どもたちが健全に育つための環境づくりを行っていくことでもあり、人との関わりの中で学習への意欲を育てていくきっかけにもなる。書き初めボランティアに行ったときに、練習ではうまく書けなかった子が、アドバイスをしたら本番では上手に書くことができていた。子どもは何かのきっかけで成長できる。そのきっかけを与えられる機会を増やしていくことが大事である。

今年度の学校経営のまとめ ・ 次年度への改善の方針

学校教育目標の実現のため、めざす児童像を教職員、児童、保護者、地域と共通理解をして取り組んできた。

インクルーシブ教育の推進のため、一人一人の豊かな心が育ち、自分の良さに気づいて自己肯定感を高め、たくましく生きる力が育つ教育環境の土台作りに努めてきた。また、いじめ認知について、生活アンケートの実施や心の健康観察による児童の声を聴く機会を増やし、児童がSOSを出せる体制づくりに取り組んだ。いじめ防止対策としては、週1回の打ち合わせ後の全校職員での情報共有や共通理解、1学期の児童指導全体会での研修、毎月「0」のつく日にピンクベストを着用して「いじめ0」を啓発するピンクシャツデーなど、これまでと同様に継続して行ってきた。サポートタイム(全教職員で全児童を指導・支援する体制)も次第に整い、連携を図りながら実施することで活用が進み、いじめの未然防止に努めることができた。

地域学校協働活動を推し進めるために、校内研修や拡大学校運営協議会を活用して学びを深め、生活科や総合的な学習の時間の単元構想や計画を修正して、児童が本物と出会ったり本物に触れたりして学ぶ機会を増やすことで、各学年が地域と共に行う授業を実践してきた。

教材研究、研修の時間を確保するために、学年担任制や教科担任制の工夫、グループ活動の活性化、総括のリーダーシップ、児童指導・支援の記録の一元化、教育環境の整備など働き方改革を進めてきた。

次年度も今年度同様「豊かな心と、たくましく生きる力をもった児童が育つ学校」を目指し、子どもが自分で考え、主体的に選択したり解決したりする学習ができるように授業改善に取り組む。その中で、基礎・基本となる国語の力を伸ばすとともに、子どもが、友達や教師、地域の方々など様々な人と積極的に関わり、協働的に学ぶ活動を通じて、共感する力や表現する力が育まれるようにしていく。

心の育成においては、自他の命や人権を大切にし、多様性を尊重し、互いに認め合うことのできる思いやりの心が育つ温かい学校づくりを目指すとともに、全教職員の協働体制と学校、保護者、地域、外部専門機関との連携により子どもたちを育み、チームとして子どもたちの自己肯定感を向上させるために尽力する。また、SOSが出せる安心できる環境づくりの推進と子どもの育成に努める。

健康や環境面においては、一人一人が自分の良さを伸ばし、課題に対して主体的で根気強く学ぶことができる力の育成を目指し、学習環境や教育課程をつくっていく。また、自分の健康や体力、教育環境の課題について、自ら考え行動し解決できる力の育成に努める。子ども自らが安全意識を高められることも重視していきたい。

さらに、「誰一人取り残すことのない」支援体制、互いに認め合い、思いやりのある行動ができる子どもが育つ人間関係づくりの取組、授業づくりでは、ユニバーサルデザインを取り入れた個別最適な学びと協働的な学びを推進していく。教科横断的な視点からも学びを充実させたい。

地域との連携を深めていくことで、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、「地域学校協働活動」の推進に努めていく。放課後の時間に、子どもたちが楽しい時間を過ごすことができるように、地域で子どもを育て見守る場をつくっていきたい。